

原爆文学研究会報

第5号

原爆文学研究会 二〇〇三年 一月

爆心の思考 原子爆弾について語るとき、その熱線・爆風・放射線の威力のすさまじさが強調されるが、それが明確な爆心を持つていることも重要な特質だろう。原爆の被害は爆心を中心とする同心円上に配置（階層化）され、序列化されて語られる。

例えば、広島平和研究所編『ヒロシマへの旅―平和学習のしおり』（一九九八年二月）には「正確な爆発点は、原爆ドームの東南約百五十mの「島病院」玄関げんかんから東南約二十五m地点の上空といわれています」と記され、長崎の証言の会編『平和読本・ながさきへの旅』（一九八三年八月）では「長崎市松山町一七一番地、原爆はこの標柱の真上約五〇メートルで炸裂しました」と説明されている。両書とも「死の同心円」を描いた地図を掲載し、被爆遺構の位置関係が一覧できるようになっている。そして、「爆心地から：kmで被爆した：さん」の証言。体験者の証言もより爆心に近いところで被爆した人間のものが、信頼され重要視される傾向がある。

もちろん、爆心を中心として配置された言説に全く意味がないとは言えない。原爆をいかに語るか、という問題を考えるとき、被爆者の証言はやはり重要なものであり続けるだろう。しかし、爆心を中心に配置された地図（図式）の上に自分の位置を探し続ける限り、原爆をめぐる言説は、ますますその力を失っていくしかないことも確かだろう。（体験を持たない）私たちは、爆心からすさまじい勢い

で遠ざかっているのだから。この研究会の活動を通じて、「爆心の思考」を組み換えてゆく道を探ってゆきたい。（中野和典）

第五回 原爆文学研究会報告

二〇〇二年二月二十八日（土）九州大学六本松キャンパスで開催した「第五回 原爆文学研究会」には、福岡県内外から約三〇名が集いました。

畑中氏の研究発表に続く質疑応答では、「明治末期の長崎のセールス・ポイントが現在のものと異なるのはどうしてか」「長崎のイメージの問題は、戦跡をどのようにに観光地化するかという問題につながるのではないか」等の発言がありました。

南氏の研究発表については、「失われた言葉」というとらえ方が、ある完成された全体を想定させてしまうのではないか」「事実はまだるっこい。創造的想像力といったものが重要なのではないか」等の発言がありました。



「長崎」のイメージ

——忘れられた言説に光をあてること——

畑中 佳恵（日本学術振興会特別研究員）

原爆被災から四年後の、『長崎談叢』誌上にみえる平山蘆江の随筆「天眼の秘案」は、それから五〇年以上を距てた私たちにとって、決して馴染み深いものとはいえない。彼は、明治時代に鈴木天眼が唱えた案——長崎市街を一旦焼き払って理想的に再建しようという案——をおぼろげに想起しつつ、原爆被災を意義づける。原子爆弾は、「西洋文明の発祥地」といわれるような「古い長崎」を見事に焼き尽くした。その今こそが、風景、伝統、人情といった「本来性」において「大長崎」を建造する絶好の機会なのだ……。その説得的な口調に与えたプレスコードの影響を測定することは容易でないだろう。確かなのは、「原爆のおかげでよりよく実現される」という物語が今現在、特に国内では、忌諱を含む違和感の対象となっていること。何らかの文脈で熱っぽく語られたこの言説は、今ここに至る過程のどこかで、存在しないものの圏に追いやられたようだ。

今や「長崎」といえばカステラ、そして被爆したマリア像を思い浮かべがちな私たちにおいて、その原爆のイメージは、先行する南蛮・唐・紅毛のイメージに取り込まれるようにして形成されてきたと思われる。例えば、「同じ」被爆地である広島が戦後すぐから原爆を主要な都市イメージとしてきたのと対照的に、長崎は「復古調」

と評され、近年の観光資源としても原爆よりジャ踊り、グラバー園などの方が認知されてきた。つまり、蘆江において破棄された「古い長崎」の要素こそが、現在の「長崎」のイメージを支えているのであり、原爆被災は彼が望んだような（あるいは「広島」に機能したような）新たな出発地点とはならなかったわけである。

平山蘆江、そして彼が参照する鈴木天眼の「長崎の本来性」をめぐる言説は、私たちにとつての「長崎」が中心的・支配的言説として編まれ固定化してゆくなかで、周縁にはじき出されたといつていだろう。発表者の関心はもっぱら、これら忘れられた言説（の存在、文脈）に光をあてることで、中心的なイメージが作られたものであること、それが作られてきた過程を可視化すること、に向けられている。

鈴木天眼が社主を務めた『東洋日の出新聞』の、明治三五年から四二年分を対象とした今回の調査では、蘆江が引用した天眼の言説を見出せず、この忘れられた言説の文脈と具体的に格闘することができなかった。発表では、調査対象の記事のなかに、例えば「長崎港のセールスポイントとして桜を植えよう」という「桜花港」キャンペーンなど、やはり忘れられた言説といえるものの存在が何えたことを述べるにとどまった。これは、「長崎」のイメージ形成に果たした南蛮趣味流行（明治四〇〇）の役割を評定すべく、それ以前にあり得たイメージの可能性を捉える作業として継続したい。また、当初の目的であった天眼の言説についても、原爆が「長崎」のイメージに取り込まれていく具体的様相をつかむ、という遠い目的地向かって、地道に探索し続けたいと思う。

『失われた言葉を求めて』 について

南 嘉久（福岡県生活協同組合連合会）

1. 私の書いた『失われた言葉を求めて』は何よりも自分史がベ
ースのものである。「序章」に収めた「二冊の本の紹介」の一文の内
容が原点となり、それをその後の人生というものの縦糸、横糸で織
り成していくことになった。その一文に書いた私が小さい時聞いた
私の知らない兄の「お父さん、今、何時？」という最期の言葉が私
の人生の中に重い位置を占めた。私が父とその兄のことを理解する
のに40余年が必要だったのだ。

2. 私の人生というものは原爆や戦争・平和というものを私なりに
考えざるを得ない出会いと縁にみちたものであった。少年時代、
鳥栖では特攻隊員とピアノ「月光の曲」のエピソードがある小学校
に通学し、出水には特攻隊出撃基地があった。長崎の新興善小学校
は原爆被害者の特設救護院となったところであり、片淵中学校のす
ぐそばに長崎原爆病院やABC Cがあった。高校時代には被爆者二
世の友人が急性白血病で死んだ。大学時代には米軍機ファントムが
大学の施設に墜落した。原爆で身心を苛まれた父は原爆病院で「自
分の人生はきつことばっかしやつた」とつぶやいて死んだ。生協
で働くようになった私は平和を求める運動理念とともに草の根平和
活動に取り組んだ。二児の父となっていた私は1990年に、被爆

者である父のたった一度語った（私が記憶に止めることができなかつ
た）原爆と子どもたちについての言葉を自分の内に取り戻そうとす
る。私は原爆について読み、調べる。人に会って聞く。家を訪ね探
す。手紙を出して原子野の子どもを探しまわる父の姿を知る。救援
列車と塩月正雄氏と大村海軍病院の関係を知る。その中で父と子ど
もたちの姿とその子どもたちを失った父の深い悲痛を理解する。し
かし、私がそれを本当に深く理解するにはさらに後10年の時が必要
だったのだ。

3. この本の基底にあるもの、いろいろな場面の底に一貫して流
れるものとして書いたのは、生きとし生けるもののいのちへの深い
いとおしみと他者への（人間的）感受性ということである。私自身
の人間の成長の中でそれらが深まりをみせていく。

4. 『失われた言葉を求めて』を書く中でいくつかのことについて
考えたこと、問題意識等についても触れた。

- ① 被爆体験を継承するということは可能だろうか。
- ② 被爆者の姿、思いをまるごと大切に与えらるることについて。
- ③ 原爆をその威力だけで語るのではなく、一生を通じてその人間
的悲惨さをとらえる。
- ④ 被爆二世というものをどのようにとらえるか。
- ⑤ 日本の原水禁運動、核兵器廃絶運動の不十分さ、弱さについて。
- ⑥ 「共感共苦（コンパッション）」の思想の重要性 等々。

彙報

編集後記

第五回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇二年一二月二八日(土) 十四時より
- 会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一教室
- 内容 研究発表

「長崎」のイメージ

——忘れられた言説に光をあてること——

『失われた言葉を求めて』 について

畑中 佳恵

南 嘉久

運営協議会

二〇〇三年の研究会の事業について等

- 懇親会 (十八時〜)

二〇〇三年の行事予定

- 研究会：三月・六月・九月・一二月
- 会報「原爆文学研究会報」：四月・七月・一〇月・(二〇〇四年) 一月
- 機関誌「原爆文学研究」：八月

昨年一二月の研究会で発表されたお二人には、早々に本会報のための発表要旨を寄せていただきました。おかげさまで編集作業をスムーズに進めることができました。この場を借りて御礼申し上げます。

現在、「原爆文学研究会ホーム・ページ」を作成中です。項目は「会のご案内」「機関誌」原爆文学研究「原爆文学研究会報」「原爆文学事典」「関連情報」「リンク集」「掲示板」です。この会報も、過去の会報と共にPDFファイル形式で、ネット上で閲覧できます。「原爆文学研究事典」は、今後会員の共同研究のような形で内容を充実させてゆくつもりです。URLは

<http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>

です。ぜひご覧になり、ご意見ご要望などお聞かせ下さい。(N)

※次回(第六回)の研究会は二〇〇三年三月一五日(土)に長崎大学教職キャンパスにて開催します。詳細は後日、案内状にて連絡いたします。

発行元 原爆文学研究会事務局

〒811-6520 福岡市中央区六本松4-2-1

九州大学大学院比較社会文化研究院 花田俊典研究室内

tel/fax 092-726-4597 e-mail hanada@rc.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>